

トヨタ自動車株式会社

COMPANY PROFILE



笑顔のために。期待を超えて。





取締役社長 豊田 章男

人々を安全・安心に運び、心までも動かす。
そして、世界中の生活を、社会を、豊かにしていく。
それが、未来のモビリティ社会をリードする、私たちの想いです。

一人ひとりが高い品質を造りこむこと。
常に時代の一步先のイノベーションを追い求めること。
地球環境に寄り添う意識を持ち続けること。
その先に、期待を常を超え、
お客様そして地域の笑顔と幸せにつながる
トヨタがあると信じています。

「今よりもっとよい方法がある」その改善の精神とともに、
トヨタを支えてくださる皆様の声に真摯に耳を傾け、
常に自ら改革しながら、高い目標を実現していきます。

(トヨタ グローバルビジョン 2011年3月発表)

目次

クリーンなクルマづくり	03
安全への取り組み	05
トヨタ・クオリティを世界へ	07
トヨタの広がり	13
「いい町・いい社会」の実現をめざして	15
会社概要	17



クリーンなクルマづくり

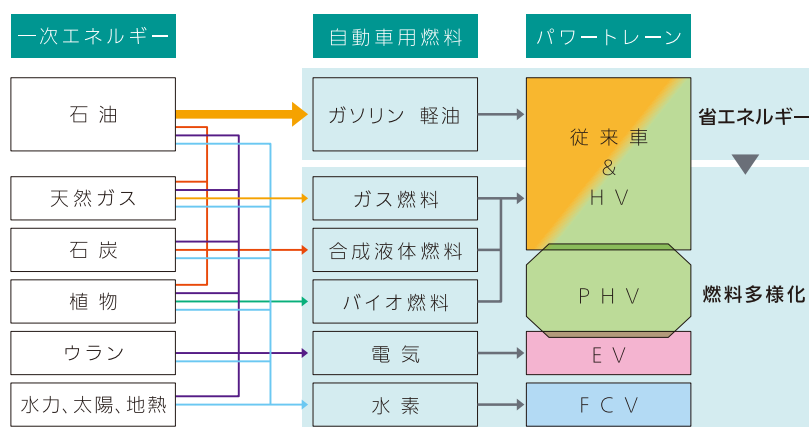
トヨタは環境問題への対応を最重要課題のひとつとして位置づけ、クルマのライフサイクルである「開発・生産・使用・廃棄」のすべての段階で人と地球に優しいクルマづくりに取り組んでいます。

究極のエコカーをめざして

トヨタは地球温暖化の要因とされているCO₂の削減や、HC、CO、NO_xなどの排出ガスによる大気汚染を防ぐため、低燃費でクリーンなクルマの開発を積極的に推進しています。またクリーンなクルマも普及させてこそ環境対策と考え、消費者にとってより魅力的なクルマとなるよう、優れた環境性能と動力性能の両立をめざしています。

トヨタは、各国、各地域でのエネルギー事情やインフラに応じて最適なクルマを提供してきました。石油を燃料とする従来車やハイブリッド車を今よりもっと省エネルギーにしながら、同時に次世代エコカーの開発を進め、燃料の多様化に対応します。

自動車用燃料・パワートレインの多様化



プリウス プラグインハイブリッド

通常は電気自動車(EV)として走行し、バッテリーの残量が少なくなるとハイブリッド車に切り替わるため、バッテリーの残量を気にせず走ることができます。2012年に販売を開始しました。



燃料電池自動車

水素で走る燃料電池自動車(FCV)は、走行中にCO₂を排出しない究極のエコカーです。2014年に乗用車タイプのFCV「MIRAI」を世界で初めて市販開始しました。

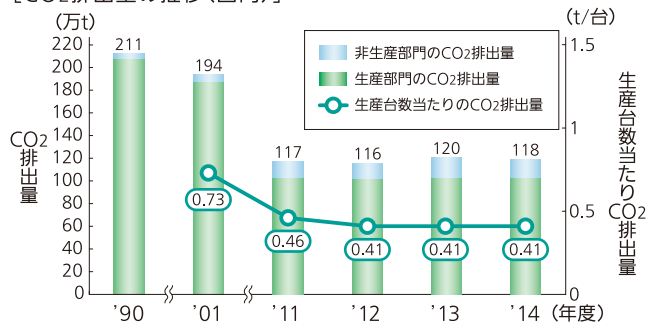
環境に優しい生産・物流をめざして

生産・物流分野では、業界トップをめざし、温暖化防止、環境負荷物質の低減、資源有効利用を重点に取り組んでいます。また、自然を活用し、自然と調和する工場づくりという考えのもと工場の森づくりなどの活動を進めています。

生産におけるCO₂排出量を低減

生産拠点と非生産拠点（オフィスなど）を合わせた目標値を設定し、CO₂排出量の削減に取り組んでいます。

〔CO₂排出量の推移（国内）〕



（注1）非生産拠点で1990年度の排出量を把握できない場合は、それ以降で把握できた最も古いデータを使用しました。

（注2）CO₂排出量は、2011年度までは、生産部門、非生産部門（パイオ・緑化研究所、福利厚生施設を除く）を対象としていました。

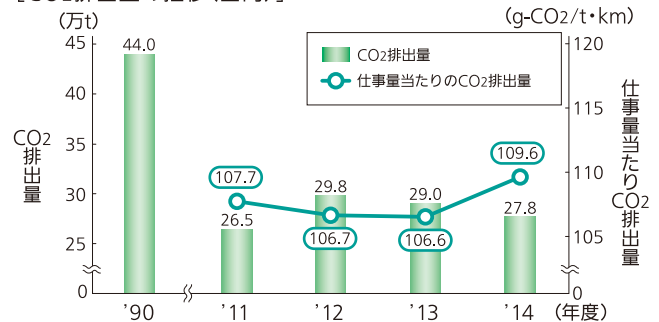
2012年度からは、非生産部門にパイオ・緑化研究所を追加しました。

（注3）CO₂換算係数は、1990年度の経団連係数を使用しています。

物流におけるCO₂排出量を低減

完成車や部品の輸送時に発生するCO₂を鉄道輸送や海上輸送への転換（モーダルシフト）、総輸送距離の低減、燃費向上などにより低減しています。

〔CO₂排出量の推移（国内）〕



（注1）2014年度より算出方法を変更したため、過去にさかのぼり数値を修正しました。

（注2）CO₂換算係数は、「ロジスティクス分野におけるCO₂排出量算定方法共同ガイドラインver3.0」（経済産業省・国土交通省）などを使用しています。



自然エネルギーの活用

堤工場では、出力約2,000kWの太陽光発電システムを導入しました。これは、組立工場で使用する電力の約半分に相当します。

（NEDO 太陽光発電新技術等フィールドテスト事業）



工場の森づくり

サステナブル・プラント活動の一環として、地域に本来生息する植物を植えるなど工場では森づくり活動を推進しています。

日本

ブラジル

持続可能な循環型社会を求めて

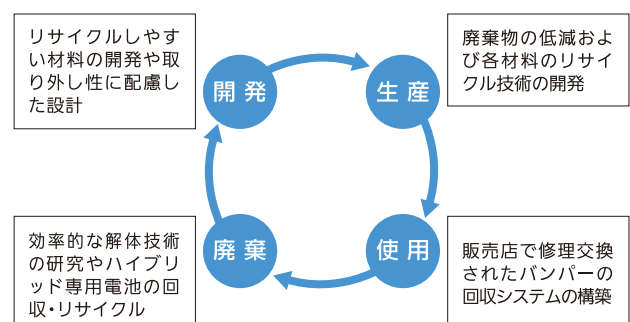
トヨタは、クルマの製造では廃棄物を減らす為に歩留り向上などに取り組んでいます。

クルマ自体ではリサイクル率95%以上の確実な維持や、自動車リサイクル制度の運営を通じ、循環型社会の実現に貢献していきます。

クルマが生まれるときから役目を終えるときまで、ライフサイクル全体について、リサイクルを考えていくことが必要です。

トヨタは、開発・生産・使用・廃棄という循環の中で、廃棄物を極力減らして再利用する活動を展開しています。例えば、世界初となる電池から電池へのリサイクルをスタートさせました。

また、リサイクルを考慮したクルマづくりに取り組んでいます。



安全への取り組み

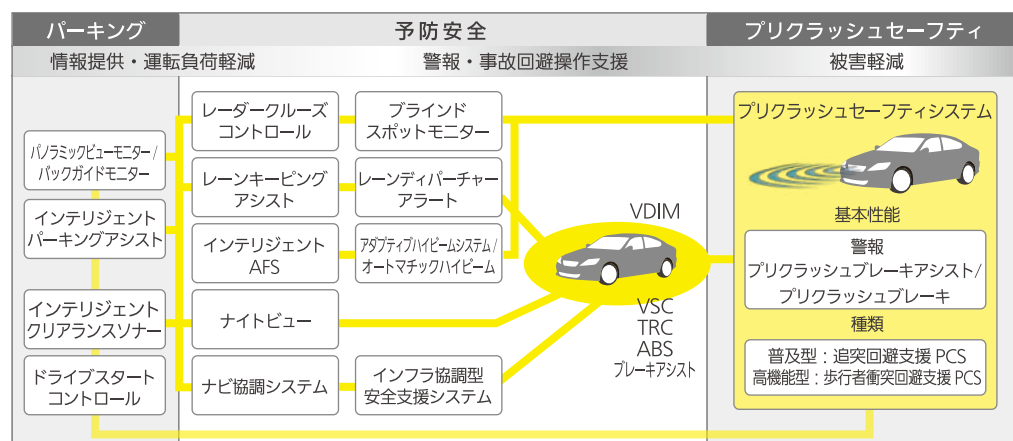
トヨタは、「交通死傷者ゼロ」という究極の願いに向かい、安全なクルマの開発、交通環境整備への参画、ドライバーや歩行者への啓発活動という3分野での取り組みを行っています。

安全なクルマをめざして

トヨタは、各国の安全基準はもとより、さらに高い目標を独自に設定し、世界トップレベルの安全技術開発に取り組んでいます。また、実際に役立つものにするため、事故統計に基づいた商品開発を行っています。

衝突事故防止に向けて

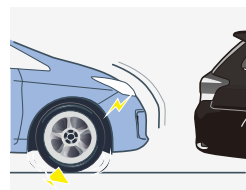
運転の主体であるドライバーを支援し、事故を未然に防ぐためのシステムを開発しています。



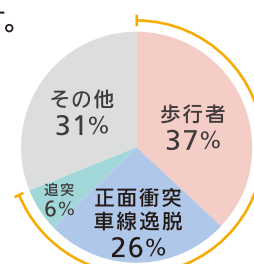
交通事故統計に基づき、死亡事故の発生割合が高い事故形態に対応する機能をパッケージ化しました。順次トヨタの車に装備し、交通事故の大幅な低減を図ります。

1 衝突回避支援

交通事故の中で最も多く、死亡事故原因でも上位となる「追突事故」において、衝突回避支援または被害軽減を図ります。



プリクラッシュセーフティシステム[PCS]



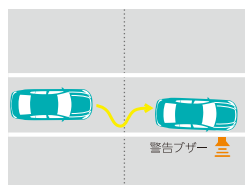
約7割の事故形態に着目

事故類別別死亡事故の割合
出典：2012年 警察庁 交通事故統計

Toyota Safety Senseの基本機能

2 車線逸脱防止支援

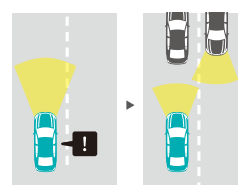
自動車乗車中の死亡事故に多い「正面衝突」や「車線逸脱事故」低減に寄与します。



レーンディパーチャーアラート[LDA]

3 夜間視界支援

夜間に多い「横断歩行者事故」を未然に防ぐために歩行者の早期発見に寄与します。



オートマチックハイビーム

衝突時の乗員・歩行者の保護のために

トヨタは、実際の事故やけがの調査・解析、衝突シミュレーションや年間約1,600回の衝突試験を行い、安全なボディ構造や乗員保護装置の開発を行っています。クルマが衝突した際は、ボディが衝突時の衝撃を吸収・分散し、同時にシートベルトとエアバッグが作動し、乗員を保護します。また、歩行者の保護にも配慮し、常に性能を進化させています。



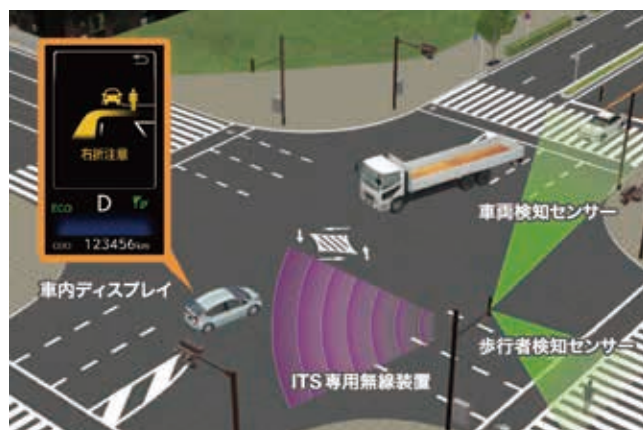
衝突安全ボディ構造

重量や車高の異なるクルマ同士の前面、側面、後面からの衝突試験を行い、安全なボディ構造を追求しています。

安全な交通環境の実現をめざして

人・クルマ・道路を一体として捉えた新たな交通システムづくりやクルマと情報通信の融合、公共交通の将来像提案など、トヨタは高度な道路交通システム（ITS）の実用化に向けた取り組みを通して、交通事故の低減をめざしています。

インフラ協調型安全運転支援システムは、車両単独では対応が困難な見通しの悪い交差点での出合頭事故や右折時の衝突事故などに対応するため、道路に設置したセンサーとクルマ、クルマとクルマ、あるいはクルマと歩行者が直接通信することで、安全運転を支援し、事故防止につなげるシステムです。トヨタは安全で快適な交通社会の実現をめざし、このシステムの普及促進に向けた取り組みを進めています。



右折時衝突防止支援システム

交通安全啓発の取り組み

ドライバー向けの安全運転講習会や幼児向けの教材の贈呈、歩行者の安全を見据えた反射材啓発など、交通を構成するあらゆる人に向けた交通安全活動に取り組んでいます。



トヨタ ドライバーコミュニケーション
富士スピードウェイ内にある「トヨタ交通安全センター モビリティ」では、安全運転のレベルアップを目的とした安全運転講習会を開催しています。



トヨタセーフティスクール
'75年から幼稚園・保育園の園児を対象に正しい横断歩道の渡り方など、幼児の交通安全教育を続けています。



トヨタ交通安全キャンペーン
春と秋の「全国交通安全運動」に呼応し、全国の販売店各社と共同で「トヨタ交通安全キャンペーン」を実施しています。

トヨタ・クオリティを世界へ

トヨタのクルマが世界の国々で信頼され愛されるのは、
お客様第一にもとづく「開発、生産、販売・サービス」の総合力によるものです。
これからも、変化する社会・経済環境などに対応しながら、
高品質でお求めやすい商品を世界のお客様に提供していきます。

グローバルな開発体制

基礎研究、先行開発から新製品開発まで、広く深い研究開発体制を構え、
トヨタ・クオリティのさらなる進化を求めて、世界の各地で研究開発に取り組んでいます。

日本



本社テクニカルセンター
業 務:製品企画、デザイン、
設計、評価



東富士研究所
業 務:先行開発



東京デザイン研究所
業 務:先行デザイン



土別試験場
業 務:評価



(株)豊田中央研究所
業 務:基礎研究

ヨーロッパ



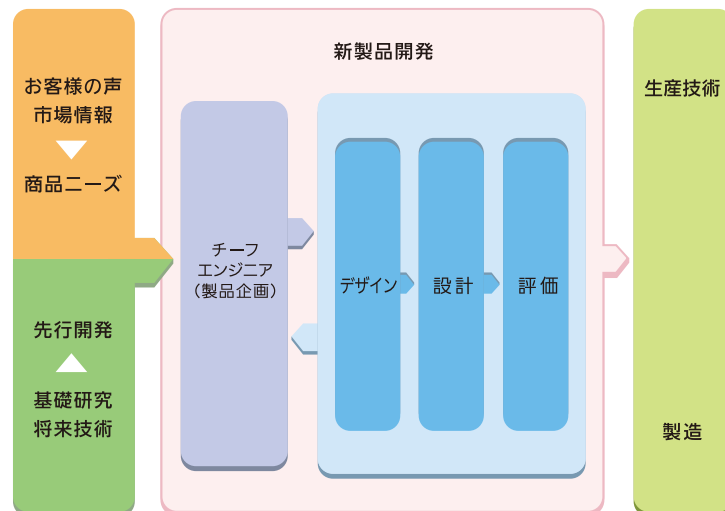
トヨタモーター
ヨーロッパ(株)
所在地:ベルギー、イギリス
業 務:設計、評価



トヨタモータースポーツ(有)
所在地:ドイツ
業 務:モータースポーツ車両開発、
先行開発



トヨタヨーロッパ デザイン
ディベロップメント(有)
所在地:フランス
業 務:デザイン



中国



トヨタ自動車
研究開発センター(中国)(有)
所在地:江蘇省
業 務:基礎研究、技術調査、評価



一汽トヨタ技術開発(有)
所在地:天津市
業 務:設計、評価、認証

アメリカ



トヨタモーターエンジニアリング&
マニュファクチャリング
ノースアメリカ(株)
所在地:ミシガン州、
カリフォルニア州、
アリゾナ州、ワシントンD.C.
業 務:製品企画、設計、評価、基礎研究



キャルティデザイン
リサーチ(株)
所在地:カリフォルニア州、
ミシガン州
業 務:デザイン

アジア



トヨタモーターアジア
パシフィック エンジニアリング&
マニュファクチャリング(株)
所在地:タイ
業 務:設計、評価



广汽トヨタ自動車(有)
研究開発センター
所在地:広東省
業 務:設計、評価、認証

現地現物にもとづく開発

エンジン、トランスミッションなどのユニット部品は日本において開発を行っています。一方、デザインやクルマの使われ方にかかわる部分は、世界の各地域に設けた開発部署のデザイナーやエンジニアと共に現地現物にもとづく開発を行っています。

また、統合品質情報システムを通じて日々収集される世界各地の品質・安全情報は、開発部門内に設けた専任部署により集約され、迅速かつ確実に設計に反映されています。



現地テストを織り込んだデザイン開発



インドネシアでの悪路走行



中国の4,000m高地での車両使用環境調査

お客様目線での評価

試験用に試作されたクルマは、世界トップレベルの安全性、耐久性と品質を追求したトヨタ標準にもとづき評価されます。

評価にあたっては、世界各地の様々な環境での使われ方を調査しお客様目線での評価に努めています。評価試験を通して得られた結果は、設計へとフィードバックされ製品開発が進められます。



低温降雪装置による評価

生産技術による品質のつくり込み

クルマの量産に向け、品質確保がしやすく生産性の高い生産設備やシステムを開発、導入しています。製品開発の段階では、設計、生産技術、製造の各部署と仕入先が一体となって品質をつくり込み、生産のしやすい製品の図面をつくり上げていきます。また、ボディ溶接ラインなどの各生産工程に最新の計測技術を導入し、測定値の傾向をみて不良が発生する前に対策を行っています。万が一、不良が発生した場合には直ちに生産ラインを止め、即座に不良の要因を解析し、対策を行います。



3Dバーチャル画面による製品検討

世界で根付くトヨタ生産方式

トヨタのクルマは、日本に加え、世界27の国・地域に広がる生産会社でつくられています。

グローバル化したトヨタ生産方式を支えている大切な要素、それは人です。

「モノづくりは人づくり」の考えのもと、共通の価値観をもって、世界各地の工場でトヨタ生産方式を実践できる人材の育成に努めています。

Challenge

夢の実現に向けて、
ビジョンを掲げ、勇気と
創造力をもって挑戦する。

- 「モノづくり」を核とした付加価値の創造
- 挑戦のスピリット
- 長期指向
- 熟慮と決断

Kaizen

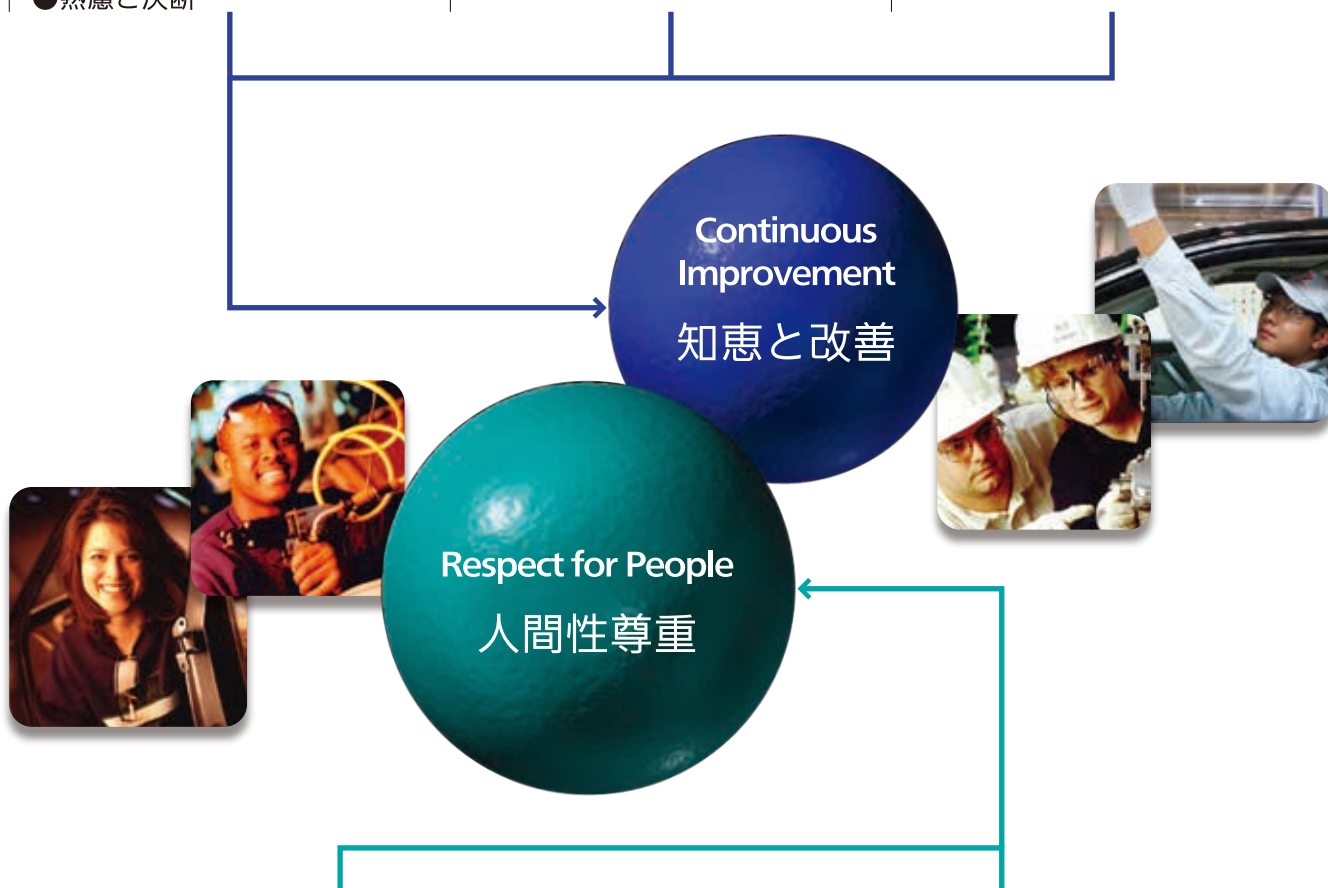
常に進化、革新を追求し、
絶え間無く改善に
取り組む。

- 改善、革新の追求
- リーンなシステムの構築
- 組織的学習の徹底

Genchi Genbutsu

現地現物で本質を見極め、
素早く合意、決断し、
全力で実行する。

- 現地現物主義
- 効果的合意形成
- 実践主義、達成指向



Respect

他を尊重し、誠実に相互理解に努め、
お互いの責任を果たす。

- ステークホルダーの尊重
- 会社と社員の「相互信頼」と「相互責任」
- 誠実なコミュニケーション

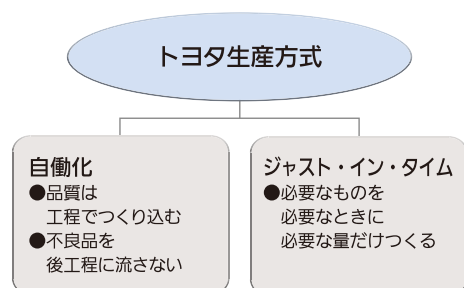
Teamwork

人材を育成し、
個の力を結集する。

- 人材育成の重視
- 個人の人間性尊重と、チームの総合力発揮

トヨタ生産方式（TPS）

TPSは、お客様第一にもとづき構築されたトヨタの生産の根底に流れる考え方です。その目標は、徹底したムダの排除による高品質・短い納期・低コストです。それを実現しているのが、「品質は工程でつくり込む」ニンベンのある自動化と「必要なものを、必要なときに、必要な量だけつくる」ジャスト・イン・タイムの考え方です。



世界中のどこでも「品質は工程でつくり込む」を合言葉に、チームメンバー1人ひとりの厳しいチェックの目が注がれます。



「よい品よい考」のモットー（'53年制定）のもと、絶え間ない改善に取り組んでいます。

生産・教育体制のグローバル化

アメリカ、イギリス、タイの生産人材育成センターでは、生産の現場リーダーに訓練を行っています。地域各国からの参加者は、ここで学んだノウハウを自工場に持ち帰り、指導者としてチームメンバーの育成に努めています。日本では、2015年「TPS推進センター」に名称を改め、上記内容に加え広く「ものづくりの総合力」に貢献するため、ベストプラクティスの作成・展開等新たな取り組みを進めています。



指導を受けノウハウを学ぶ研修生



ビジュアルマニュアルで研修を行う研修生

海外生産拠点

27の国・地域に
50の製造事業体があります。

- 海外生産会社
- 生産人材育成センター



相互信頼にもとづくサプライヤーとの協業

トヨタは、サプライヤーと一体となったものづくりを追求し、品質をはじめお客様の満足の実現に取り組んでいます。

サプライヤーとの取引にあたっては、相互信頼を基盤とする相互繁栄をめざしています。

取引を希望するサプライヤーにはオープンでフェアな参入機会を提供しています。

また、選定に際しては、品質・原価・技術・納期などの能力に加え、CSRや改善に取り組む経営姿勢などを総合的に勘案しています。

さらに、車両開発にあたっては、初期段階からサプライヤーも参画し、製品安全を最優先に部品のつくられ方、クルマでの使われ方にいたるまで協力して部品開発を行います。



部品検討会議

開発の初期段階から、サプライヤーの方々と技術開発や原価低減のアイデアなどを検討しています。



生産準備支援

新型車への切替を円滑に行うため、サプライヤーの方々と一緒に生産準備活動を実施しています。

一人ひとりのお客様にご満足いただくために

トヨタは、160以上の国・地域に広がる販売・サービス拠点を通して、お客様にクルマをお届けしています。

お客様にいつまでも満足していただくために必要なこと、それはお客様のニーズを知るための努力を怠らないこと、そしてお客様にトヨタのクルマのことをもっと知っていただくための努力を続けることだと考えます。

そのための基本は人です。

トヨタでは世界各地にトレーニングセンターを設け、人材の育成を続けています。

また、各地域のサービス技術分室を活用したお客様の苦情・不具合情報の収集と統合品質情報システムを通じた様々な品質情報の解析により、問題の早期発見・早期解決に努めています。



お客様のニーズを知り、トヨタのクルマを知っていただく努力を世界各地で続けています。

もっといいクルマづくりに向けたモータースポーツ

トヨタは、モータースポーツ活動をクルマの持つ「夢」や「感動」をお客様にもたらす大切なものと位置づけ、「もっといいクルマづくり、クルマファンづくり」の主軸として、「TOYOTA GAZOO Racing」による様々な活動を行っています。現在FIA世界耐久選手権（WEC）、日本におけるSUPER GTなど、さまざまなカテゴリーのレースに挑戦し、その中でもニュルブルクリンク24時間耐久レースや全日本ラリー選手権では、社員もメカニックとして参加することにより、もっといいクルマづくりのための人材育成につなげています。更に2017年からは世界ラリー選手権（WRC）にも参戦し、チャレンジの場を広げています。

また「TOYOTA GAZOO Racing FESTIVAL」や「TOYOTA GAZOO Racing PARK」など、メーカーの枠を超えたクルマ好き、クルマファンの交流の場づくりにも取り組んでいます。



TOYOTA GAZOO Racing FESTIVAL 2015



2016年FIA世界耐久選手権（WEC）参戦車両
TS050 HYBRID



2016年ニュルブルクリンク24時間レース参戦車両
TOYOTA C-HR Racing

すべての人々に移動の喜びを

トヨタはお客様との対話を大切にしてウェルキャブを開発しています。その結晶が「気兼ねなく介助され、気軽に介助できる」クルマであり、「お身体の不自由な方が快適に運転できる」クルマです。これらのウェルキャブを実際のクルマでご検討いただけるウェルキャブ総合展示場（トヨタハートフルプラザ）やウェルキャブ常設販売店店舗（ウェルキャブステーション）の拡充を推進しています。海外では、日本での仕様に準じたアレンジを行い、お客様のご注文にお応えしています。



エスカイア

「車いす仕様車（スロープタイプ）タイプ1 車いす2脚仕様」
車両後部に標準装備されたゆるやかなスロープから車いすのまま乗り降りができ、介助される方、介助する方の負担を軽減する様々な機能を備えています。



乗車の際はセーフティベルトで車いすの後退を防ぎます。

トヨタの広がり

クルマで培った技術やノウハウを使い、より豊かな暮らしを実現するためにクルマ以外の事業にも取り組んでいます。

現在行っている事業

e-TOYOTA

トヨタは、クルマとITの融合を目的にe-TOYOTA事業を展開しています。インターネットサービスとして、クルマ情報ポータルサイトGAZOOや、インターネット会員制度TOYOTA Web Passportなどの企画・開発を行っています。また、車載情報端末テレマティクスを活用した情報サービスT-Connect／G-Linkの企画・開発や、中国、タイ、中近東など海外への事業展開も進めています。



車載端末向け情報サービス

金融

トヨタは、世界36の国・地域でグローバルな自動車販売金融ネットワークを展開し、トヨタのクルマをお買い求めいただくお客様のニーズに合った金融サービスを提供しています。日本では、自動車販売金融に加え、クレジットカードなどの幅広い金融サービス事業も展開しています。



毎日の暮らしをサポートする「TS CUBIC CARD」と携帯電話やカードをかざすだけでスピーディに決済できる「QUICPay」

住宅

「日本の住まいを良くしたい」オールトヨタの英知と技術力を結集して、住宅事業に取り組んでいます。その中心となる戸建事業では、快適かつ経済的で地球環境にも優しい「エコミライの家」や「安全・安心・健康・快適」の住まいとして高い評価を得ているスマートハウスを販売。また、分譲マンション・賃貸用住宅・高齢者向け住宅やリフォームなど、事業領域はさらに拡大しています。



自然と調和する上質なスマートハウス「シンセ・フィアス」
(2013年度グッドデザイン賞受賞)

マリン

マリンレジャーをより多くの人々に親しんでいただくため、プレジャーボートとマリンエンジンを製造・販売しています。快適性と凌波性に優れた船体及び自動車用エンジンをベースとした高性能エンジンが特長となっているプレジャーボートPONAMシリーズは、フィッシングとクルージングの機能を両立しています。



日本ボート・オブ・ザ・イヤー2014を受賞した「PONAM-31」

バイオ・緑化

循環型社会の構築に貢献するため、バイオ・緑化事業に取り組んでおり、環境緑化事業、畜産バイオマス事業などを推進しています。さらに、農業支援事業として、米生産法人向け農業IT管理ツール「豊作計画」の提供を開始しました。本ツールの提供を通じて、国内の農業の競争力強化に寄与したいと考えています。

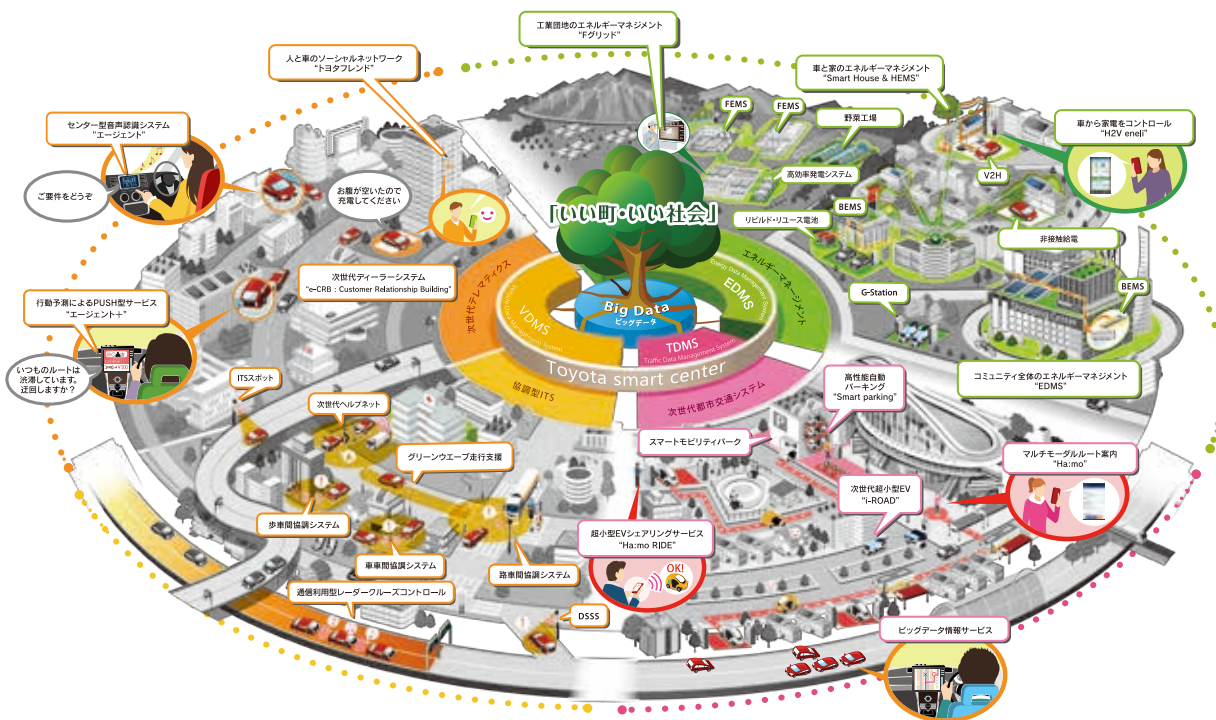


駐車場緑化「Smart Green Parking」

将来に向けた取り組み

スマートモビリティ社会の実現をめざして

クルマと人とコミュニティを相互につなぐことで、クルマの移動から生活シーンまで誰もが安心で心ときめく社会の実現をめざしています。人とつながることで、クルマが頼りがいのあるパートナーになる「次世代テレマティクス」。クルマと道路とつながることで、交通事故ゼロの社会をめざす「協調型ITS」。街とつながることで、無理なく質の高いエコライフを実現する「エネルギーマネジメント」。社会とつながることで、ストレスフリーな交通社会を構築する「次世代交通システム」。これらの取り組みを通じ、安心して豊かな生活に貢献していきます。



パートナーロボット

「すべての人に移動の自由を そして、自らできる喜びを」というビジョンを掲げ、よりサステナブルな社会と安心・安全・快適な生活の実現をめざします。

リハビリテーションロボットは早期実現のため医療機関の実証を拡大すると共に、生活支援ロボットは複数の研究機関等と連携して技術開発を推進する仕組みを立ち上げました。



リハビリテーションロボット



生活支援ロボット

「いい町・いい社会」の実現をめざして

トヨタは、「いい町・いい社会」の実現とその持続的発展のため、社会の幅広い層と力を合わせ、持てる資源を有効に活用しながら、社会貢献活動を展開しています。

また、「環境」「交通安全」「人材育成」をグローバル重点領域とし、これに各地域の社会ニーズに応じた分野を加えて取り組んでいます。

国内 ＊「交通安全」の取り組みはP6をご覧ください



トヨタの森

豊田市内の社有林を、かつて人々の暮らしとともにあった「里山」として整備するとともに、小学生の自然体験学習などのフィールドとして活用しています。



トヨタ白川郷自然学校

世界遺産の合掌集落・白川郷の豊かな自然に抱かれた岐阜県白川村に設立。子供から大人まで自然体験プログラムを通して、環境保全の大切さを学んでいます。



トヨタコミュニティコンサート

全国で活動しているアマチュアオーケストラの公演を(公社)日本アマチュアオーケストラ連盟と連携し、販売会社グループとともに支援しています。



MIRAIへつなぐ「夢の教室」in豊田

トヨタの運動部所属のアスリートなどが、夢先生として、小学生に夢を持つことの素晴らしさ、努力することやチームワークの大切さを伝えます。



科学のびっくり箱!なぜなにレクチャー

子供たちにモノづくりの大切さや科学の楽しさを伝えるため、社員ボランティアが講師を務める科学工作教室を全国で開催しています。



トヨタボランティアセンター

「環境保全」「災害」「福祉」などを重点分野とし、センターの自主企画や地域の団体から寄せられる活動の紹介などを通じて、従業員のボランティア活動を支援しています。

文化関連施設

自動車文化の発展を願い各種文化関連施設を一般公開しています。

トヨタ会館

トヨタがめざす豊かなモビリティ社会と最新の「クルマづくり」を紹介。

トヨタ博物館

ガソリン自動車誕生から約100年間の歴史を、実用車を中心に紹介。

トヨタ産業技術記念館

トヨタグループ発祥の地に残された当時の建物を活かして繊維機械と自動車技術の変遷を紹介。

トヨタ鞍ヶ池記念館

トヨタ自動車の創業者 豊田喜一郎と「クルマづくり」の足跡を紹介。

豊田佐吉記念館

日本の産業の礎を築いた豊田佐吉の志、情熱を感じ、親しんでいただく記念館。

メガウェブ

トヨタの最新モデルを展示。試乗もできるクルマのテーマパーク。

関連法人

トヨタ財団

世界的視野に立ち、長期的かつ幅広く社会活動に寄与すべく、国内および海外各国の研究や事業を助成しています。

豊田工業大学

先端的研究と開発型技術者の育成のため、少人数での密度の濃い教育、世界的レベルの研究を推進しています。

トヨタ・モビリティ基金

より良いモビリティ社会の実現に向けて、NPOや研究機関などによる活動をグローバルに助成しています。

海外



トヨタ・エコユース（インドネシア）

トヨタの問題解決手法を用いて高等学校内での節電や廃水処理など、環境改善プロジェクトに取り組んでいます。



中国青年トヨタ環境保護助成活動（中国）

中国共産主義青年団中央、中華全国青年連合会と共同で、環境保護につながる活動を募集。優秀プロジェクトを選考し助成を行っています。



生態系保護を支援（ブラジル）

地域と地元NGOと連携し、ブラジル最大の沿岸生態系保護地区「APA・コスタ・ドス・コライス」のサンゴ礁、マングローブ、絶滅危機にあるマナティーなどの動植物を保護しています。



交通安全教育（タイ）

バンコクなどに造った交通公園に地域の子供たちを招待し交通安全教育を展開。参加者は楽しみながら交通ルールを学んでいます。



交通安全教育（トルコ）

交通安全週間にあわせ、交通安全啓発用キットを提供するなど、子供の交通安全教育を促進しています。



トヨタ安全運転訓練プログラム（ベトナム）

ベトナム交通警察と共同で安全運転インストラクター養成プログラムを実施。安全運転技術とマインド、啓発方法を学んだベトナム初「安全運転インストラクター」が誕生し、活動を始めています。



王立植物園と提携し生物多様性促進（イギリス）

キュー王立植物園とパートナーシップを樹立し、希少動植物などの生息地確保に向けた工業用地の自然環境復元計画や、土着植物の種子の採取・保管などに取り組んでいます。



トヨタ親子学習プログラム（アメリカ）

全米家庭教育センターと連携し、教育機会に恵まれなかった親とその子供を同時に教育するプログラムを支援しています。



トヨタ・ティーチ（南アフリカ）

小学生の学力向上のため、教員を対象に英語・数学・理科の指導と学校運営・管理方法を学ぶプログラムを行っています。



トヨタ助学金プログラム（中国）

中国宋慶齡基金会と共同で、経済的な理由で大学進学・進級が困難な学生を支援しています。



貧困地域の定期医療サービス（フィリピン）

医療関係者・歯科団体・製薬会社・自治体などの協力のもと、年1回の定期医療サービスを実施しています。従業員をはじめ、約250名のボランティアが参加しています。



ボランティアを通じた地域貢献活動（アメリカ）

アメリカの製造事業者では、従業員やその家族のボランティア活動を促進しています。従業員の活動時間に応じて、従業員が指定した慈善団体に会社から寄付を行うなど、様々な取り組みを実施しています。

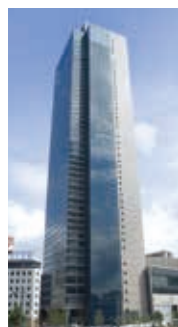
会社概要



本社



東京本社



名古屋オフィス

創 立 1937年(昭和12年)8月28日
資 本 金 6,354億円
従業員数 74,890人(連結 369,124人)

■営業状況:2018年3月期

〈連結ベース〉

売上高	29兆3,795億円
営業利益	2兆3,998億円
当期純利益	2兆4,939億円

※連結子会社606社 持分法適用会社57社

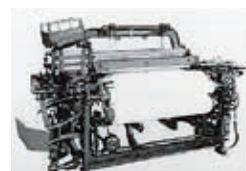
本 社 〒471-8571 愛知県豊田市トヨタ町1番地 Tel(0565)28-2121
東 京 本 社 〒112-8701 東京都文京区後楽1丁目4番18号 Tel(03)3817-7111
名古屋オフィス 〒450-8711 愛知県名古屋市中村区名駅4丁目7番1号 Tel(052)552-2111

トヨタの沿革

1867	慶応 3	豊田佐吉 誕生
1894	明治 27	豊田喜一郎 誕生
1924	大正 13	無停止杼換式豊田自動織機(G型)完成
1929	昭和 4	自動織機の特許を英国の会社に譲渡
1930		5 豊田喜一郎 小型ガソリンエンジンの研究を開始
1933		8 (株)豊田自動織機製作所に自動車部を設置
1935		10 創業時の経営理念をまとめた「豊田綱領」発表
1936		11 AA型乗用車 発表
1937		12 トヨタ自動車工業(株)設立(資本金1,200万円)
1938		13 挙母工場(現本社工場)操業開始
1950		25 経営危機(労働争議・人員整理)トヨタ自動車販売(株)設立
1951		26 創意くふう提案制度 発足
1954		29 テクニカルセンター(技術本館) 設立
1955		30 トヨベツ・クラウン(トヨタ初の本格的乗用車)発表
1957		32 国産乗用車 対米輸出第1号(クラウン) 米国トヨタ自動車販売(株)設立
1959		34 元町工場(日本初の乗用車専門工場)操業開始
1962		37 「労使宣言」に調印
1965		40 デミング賞実施賞受賞
1966		41 高岡工場 操業開始 カローラ発表
1970		45 堤工場操業開始 セリカ、カリーナ発表
1974		49 トヨタ財団 設立
1975		50 住宅事業に参入
1982		57 トヨタ自動車工業(株)、トヨタ自動車販売(株)合併 新社名「トヨタ自動車(株)」
1988		63 米国 トヨタ モーター マニュファクチャリング ケンタッキー(株)生産開始
1989	平成元年	米国 LEXUS店設立
1992		4 英国 トヨタ モーター マニュファクチャリング(UK)(株)生産開始
1997		9 プリウス(世界初の量産ハイブリッド車)発表
1999		11 国内生産累計1億台達成
2000		12 中国 四川一汽トヨタ自動車(有)生産開始
2002		14 中国 天津一汽トヨタ自動車(有)生産開始
2006		18 中国 广汽トヨタ自動車(有)生産開始
2012		24 プリウスPHV(プラグインハイブリッド車) 発表 グローバル生産累計2億台達成
2014		26 MIRAI(世界初の市販燃料電池自動車)発表 一般財団法人トヨタ・モビリティ基金 設立
2017		29 ハイブリッド車のグローバル販売累計1,000万台達成



豊田佐吉



無停止杼換式豊田自動織機(G型)

一、上下一致、至誠業務に服し、産業報国の実を挙げべし
一、研究と創造に心を致し、常に時流に先んずべし
一、華美を戒め、質実剛健たるべし
一、温情友愛の精神を発揮し、家庭的美風を作興すべし
一、神仏を尊崇し、報恩感謝の生活を為すべし

「豊田綱領」



豊田喜一郎



AA型乗用車



トヨベツ・クラウン



労使宣言調印



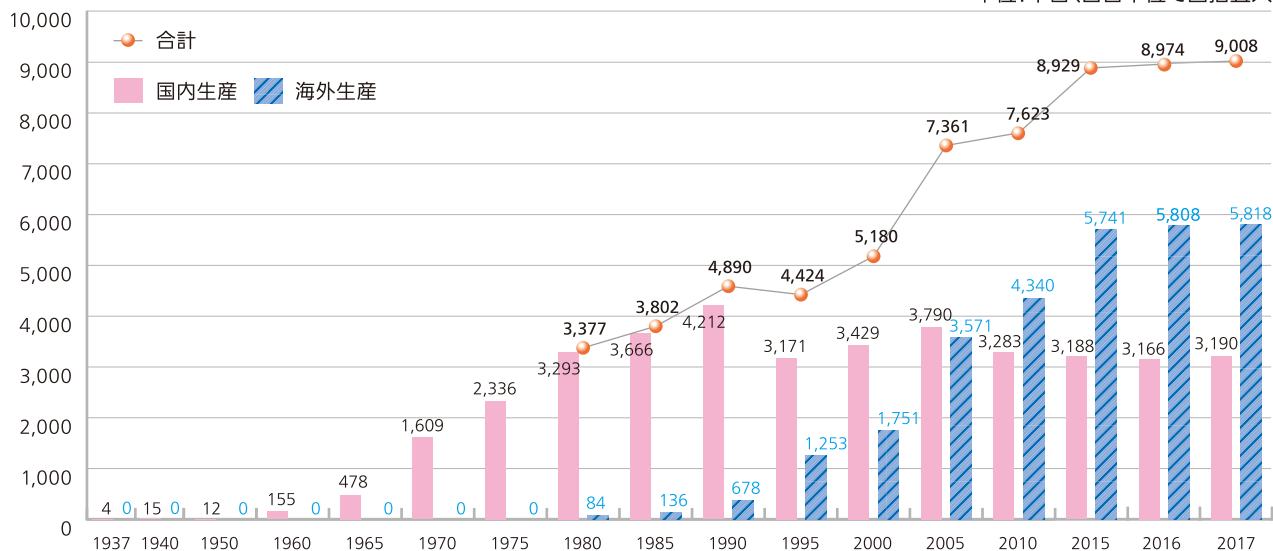
デミング賞実施賞



初代プリウス発表

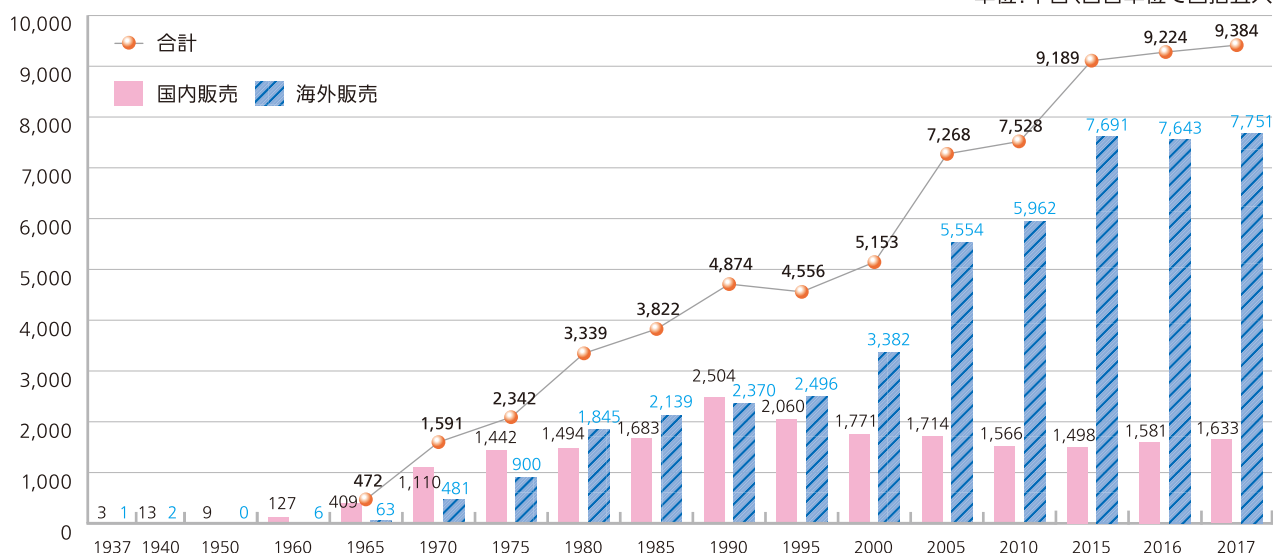
トヨタの生産台数の推移（～2017）

単位：千台（百台単位で四捨五入）



トヨタの販売台数の推移（～2017）

単位：千台（百台単位で四捨五入）



国内事業拠点



トヨタ自動車株式会社

社会貢献推進部

www.toyota.co.jp



TOYOTA

